

茨木 智, 藤田 紘名

名古屋市立大学経済学部

語彙構造からみる
学習指導要領と大学入試問題の比較

2026年3月23日

The Society of Economics Nagoya City University

名古屋市立大学経済学会

語彙構造からみる

学習指導要領と大学入試問題の比較

茨木 智, 藤田 紘名

2026年3月23日

要旨

学習指導要領とは、全国どこの学校でも教育において一定の水準が保てるよう、文部科学省が定めている教育の拠り所である。これは、およそ5~10年ごとに改訂されていて、近年だと1989年、1998年、2003年、2008年、2017年に実施されている。また大学入試においては、2021年度にセンター試験から大学入学共通テストに変わり、従来の知識・技能の評価に加え、「思考力・判断力・表現力」を重視して評価することを目的に変化を遂げた。このような教育の理念の転換が実際の大学入試問題にどの程度反映されているのかについては明らかにされていない。

先行研究では、大学入試問題の出題傾向や難易度変化を個別に分析した研究が多く見られる。一方で、学習指導要領と入試問題を同一の分析枠組みに置き、長期間にわたって両者の対応関係を数量的に検討した研究は限られている。そこで本研究では、対応分析や共起ネットワーク分析などのテキストマイニング分析を用いて、教育の理念とその実現である入試問題の語彙構造の関係を可視化することで、それらの適合性を論じる。さらに平均別分析や特定分野を除外した分析を通じて語彙構造の変化を多角的に検討する。

その結果、大学入試問題の語彙構造は全期間を通じて比較的安定しており、手続き的な語彙が中心的な役割を担っていることが確認された。また「場合の数と確率」や「データの分析」などの特定単元が試験問題の語彙構造に影響を与えていることが明らかになった。一方学習指導要領は、特に2017年改訂版において学習過程を重視する語彙が特徴的に用いられており、両者の語彙構造には違いが見られた。これらの結果から、大学入試問題は学習指導要領の内容を一定程度反映しているものの、指導要領が目指す思考力・活用力は語彙構造としては十分に可視化されていない可能性が示された。この背景には試験問題の形式の制約が関係していると考えられる。